

指示詞「カノ」「アノ」について

熊谷, 政人
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/8929>

出版情報 : 語文研究. 97, pp.27-41, 2004-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



指示詞「カノ」「アノ」について

熊谷政人

一 始めに

一般に、「カノ」は「アノ」よりも古い指示詞であり、新旧交替の対、或いは、文語と口語の対になるものとされる。確かに、現代話者之感覚としては、これは同意できるものであり、実際に、古文とされる文章の中に用いられた「カノ」の多くは「アノ」に置き換えて問題は無い。しかし、「カノ」の用例の中には「アノ」に置き換えると不自然さを感じるものが存在する。以下にその用例を数例挙げる。

・かぐや姫を見まほしつて物(も)食はず思ひつゝ、かの家
に行きてたゞみありきけれど、かひあるべくもあらず。

(竹取物語)

・かしこきものは、乳母の男こそあれ。この養ひたる子をも、むげにわがものになして、女はされどあり、男児はつと立添ひてうしる見、いささかもかの御ことに違ふ者をば爪立て、讒言し、あしけれど、(枕草子)

・なじかは僻事をさせまらせうずるぞと、申されたれば…季貞参つて、かの由を申せば (天草版平家物語)

右の用例は全て、「アノ」に置き換えると不自然さを感じる用例である。現代の感覚からすれば、「アノ」ではなく、「ソノ」「コノ」に置き換えた方が自然に感じられる。多少の個人的な感覚の違いはあると思うが、例えば、一例目を現代語に訳せば、「かぐや姫と結婚したいと思って、物も食はず

に思いながら、その（？あの）家に行つて、たたずみ歩き回つたが、どうにもならない。」となり、「アノ」よりも「ソノ」と訳した方が自然に感じられる。他の用例も同様に「ソノ」「コノ」と訳した方が自然に感じられるものである。一般に考えられているように、「カノ」「アノ」を新旧の対、文語と口語の対になるものであるとするならば、右のように、「アノ」に置き換え難い「カノ」の用例をどのように説明すれば良いのであるうか。又、右のような用例の存在が数例程度であれば、それらを例外として処理する事も可能かと思われるが、実際には、その数は決して少なくない。このように見ていくと、一般的な見方が適切であるのかどうかという疑問が起る。そこで本論では、右のような用例を中心に、指示詞「カノ」「アノ」について考察を加えたい。

二 先行研究の紹介

「カノ」と「アノ」は新旧の時代的差によるもので、古代の「カ」系語は室町時代以降、次第に「ア」系語に取つて替わられたと見るのが、今日の一般的な見方であるが、中には「カノ」と「アノ」、「カ」系語と「ア」系語の差異について説くものもある。

例えば、『かざし抄』（富士谷成章 明和四年 一七六七年）では次のように述べられている。

「あは」 俚言に あちにあるものは といふ「かは」といふよりは今すこしはるかなる心也是「か」と「あ」とのわかれ也「かは」「かれ」「かの」「あ」は只今めにみゆるものをいふ「あは」「あれ」「あ」はめのまへならぬものをもいへり但夕ぐれに人がほのみえぬ時をかはたれ時ともあれはたれ時ともいふたくひは心おほくかはらず下の「か」の條にあはせて心得べし

又、古田東朔氏は、中古の「ア」系語と「カ」系語には、次のような差異があつたと説いている。（『代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異』『文芸と思想』一四 福岡女子大学文学部）

しかし、かのにはあのと違つた用法がある。先行表現を受けたり、あるいは既に互ひに知りあつてゐると考へられる対象を述べるときに使はれるのが大部分であるが、その外に、この、そのとともに対応して使はれることで

ある。

(中略)

か系の語は、話し手に関係の深いもの、既知のもの、親近性を有するものをさすときに用ゐられ、あ系の語は、話し手と関係のないもの、未知のもの(そのために不審詰問となる)、隔たりを有するものをさすときに用ゐられる。(一部省略)

双方の研究共に、主に意味的な差異について述べたものがあり、「カ」系語が「ア」系語よりも近くのものを目指すという違いがあったという事が指摘されている。但し、前者は「アハ」は「淡路島」、「カハ」は「川」との掛詞として用いられた和歌の解釈が根拠となっており、信憑性に問題がある。後者は中古の多くの用例を検討されたものであるが、その方法は個々の用例を、前後の句、文脈の中で判断していくというもので、古田氏本人も述べられているが、主観的解釈に陥る恐れが多分にある。そこで、本論では、冒頭の用例のように、単純に「アノ」と置き換え難い「カノ」の用例を手がかりに、この問題を考えてみる事にする。

三 用例の分析

本論で調査を行ったのは、竹取物語、枕草子、大鏡、平家物語、天草版平家物語、天草版伊曾保物語、好色一代男の七作品である。翻刻は、『日本古典文学大系竹取物語』、『枕草子総索引』、『大鏡の研究上巻本文篇』、『日本古典文学大系平家物語上下』、『天草版平家物語総索引』、『文禄二年耶蘇會板伊曾保物語』、『新編西鶴全集第一巻好色一代男』に従った。旧字体は現行の字体に改めている。

冒頭の用例と重複するものもあるが、調査した作品の中から、本論で問題としている「アノ」と置き換え難い「カノ」の用例の一部を挙げる。

・竹取物語

一 又、人の申(す)やうは、「大炊寮の飯炊く屋の棟に、く」と申(す)。殿より使ひまなくたまはせて、子安の貝とりたるか」と問はせ給(ふ)。燕も人のあまた上りゐたるにおどて、巢にも上り来ず。かゝるよしの返事を申(し)たれば聞き給(ひ)て、いかゞすべきと思し煩ふに、かの寮の官人、くらつまると申(す)翁申(す)やう、

二

かぐや姫を見まほしうて物(も)食はず思ひつゝ、
かの家に行きてたゞずみありきけれど、かひあるべ
くもあらず。

・平家物語

六

孟嘗君が三千の客のなかに、てんかつといふ兵物あ
り。鶏のなくまねをありがたくしければ、鶏鳴とも
いはれけり。彼鶏鳴たかきところにはしりあがり、
にはとりのなくまねをしたりければ、

・枕草子

三

かしこきものは、乳母の男こそあれ。この養ひた
る子をも、むげにわがものになして、女はされどあ
り、男児はつと立添ひてうしる見、いささかもかの
御ことに違ふ者をば爪立て、讒言し、あしけれど、

七

又或夜二人通夜して、おなじうまどろみたりける夢
に、おきより吹くる風の、二人が袂に木の葉をふた
つぶきかけたりけるを、何となうと(ツ)て見けれ
ば、御熊野の南木の葉にてぞ有ける。彼二の南木の
葉に、一首の歌を虫ぐひにこそしたりけれ。

・大鏡

四

ものゝおかしさをえ念せさせ給はさりけるわらひたゝ
せ給ぬれば頗事もみたれけるとか小野とよをまつり
こたせ給あひた非道なる事をおほせられければさす
かにやむことなくてせちにし給事をいかゝはとおほ
してこのおとゝのし給ふことなれば不便なりと見え
といかゝすへからむとなけき給けるをなにかしの史
かことにも侍らすをのれかまへてかの御ことをとも
め侍らむと申ければ

・天草版平家物語

八

しかるを忠盛に鳥羽の院と申す帝王得長寿院と申す
寺を建て、また三十三間の堂を造つて一千一体の仏
を据えよ、その御返報にはどごなりとも空かうずる
国を下されうずると仰せられた。しかるところでか
の堂寺を宣旨のごとくに程経て造畢せられたによつ
て、その折節に但馬の国が空いたを即ち下されてこ
ざつた。

五

きさきにたち給日は先坊の御事を宮の内にゆゝしか
りて申いつる人もなかりけるにかの御乳母子に大輔
のきみといひける女房のかくよみていたしける

九

なじかは僻事をさせまらせうずるぞと、申されたれ
ば…季貞参つて、かの由を申せば…

・天草版伊曾保物語

一〇 或る片目な鹿海端を廻つて食みを尋ぬるが、かの鹿の思ふやうは、

一一 狼「それは何より易いことぢや」とて、近い郷より籠を取つて来た。狐かの籠を狼の尾先に括り付けて

・好色一代男

一二 空寝入の、恋衣と申は、次の間の洞床に、後室模様のきる物、大綿帽子、房付の念珠、など、入置て、符作り、女より、さきへ男を廻し、かの衣類を、着せて、寝させ置き、去かみさまと、申なして、下下に、油断させて、逢する、手だてもあり、

一三 中にも男ひとりといはれて、すこし力瘤ある者、半弓に鳥のしたの、矢の根をつがひ樽縁より下に、飛下るを、滝井山三郎と申、少人つづきて、彼男を押し止め、

以上、用例一〜一三は、「アノ」に置き換え難い用例である。このような用例は調査した作品の全てに見られ、いずれも「ソノ」「コノ」に置き換えた方が自然に感じられるものである。

現代語において、「カノ」を「アノ」ではなく、「ソノ」「コノ」に置き換えた方が適当であるという事は、右の用例

が文脈指示の用例ではないかという事を推測させる。現代語において、文脈指示は「ソ」系語「コ」系語が担つものと考えられ、「ア」系語はこれを持たないとされる。恐らく、古典語においてもこれは当てはまる事であり、少なくとも調査した作品中の「アノ」の用例において、文脈指示としか思われぬ用例は一例も確認できなかった。従つて、「カノ」を「アノ」ではなく、「ソノ」「コノ」に置き換えた方が適当であるという事は、「カノ」が「アノ」と異なり、文脈指示の用法を持つ為ではないかと考える事に一応の妥当性はあると思われる。文脈指示の用法は、先行詞が存在する先行文脈が存在すれば良い為、一般的な物語形式の資料であれば、地の文・会話文共に見られる用法である。これは現場指示の用法が、話し手・話し手のいる場・指示対象の三つ、或いは、最低でも話し手と指示対象の二つを必要とし、物語形式の資料においては会話文にしか見られない点と異なる。上記の「アノ」と置き換え難い「カノ」の用例が、地の文・会話文共に見られる事は、「カノ」が文脈指示の用法を持つのではないかとする仮説を補強するものになり得る。

次に、「アノ」に置き換えて問題の無い「カノ」の用例を挙げる。これには二つの用法がある。一つは現場指示であり、一つは記憶指示と呼ばれる用法である。

先ず、現場指示の「カノ」「アノ」の用例を挙げる。

・竹取物語

・「カノ」 用例無し

・「アノ」 用例無し

・枕草子

・「カノ」

一四 衣の裾、裳などは、御簾の外に皆おしいだされたれば、殿、端の方より御覧じいだして、「あれは誰そや。かの御簾の間より見ゆるは」ととがめさせ給ふに、

一五 大蔵卿ばかり耳とき人はなし。まことに、蚊のまつ

げの落つるをも聞きつけ給ひつべうこそありしか。

職の御曹司の西面に住みしころ、大殿の新中将宿直

にて、ものなど言ひしに、そばにある人の、「この

中将に扇の絵のこと言へ」とささめけば、「今、か

の君の立ち給ひなむにを」と、いとみそかに言入る

るを、その人だにえ聞きつけで、「なにとか、なに

とか」と耳をかたづけ来るに、遠く居て、「にくし。

さのたまはば、今日は立たじ」とのたまひしこそ、

いかで聞きつけ給ふらむとあさましかりしか。

・「アノ」 用例無し

・大鏡

・「カノ」

一六 ひととせ入道殿の大井河に逍遙させ給ひしに作文のふね管弦の船和歌のふねとわかたせ給ひてそのみちにあたるとる人々をのせさせたまひしにこの大納言殿のまいりたまへるを入道殿「かの大納言いつれのふねにかのらるへき」とのたまはすれば「和哥の船にのり侍らむ」との給ひてよみ給へるそかし

・「アノ」

一七 くといへは重木このおきなもあのぬしの申されつるかごとくたくたしき事は申さし

一八 十三にておほきおほとのにまいりきとの給へは十はかりにて陽成院のをりさせたまふとしいますかりけるにこそそれにてすいし思にあの世次のぬしは今十余年か弟にこそあむめれば百七十にはすこしあまり八十にもよはれにたるへしなと手をおりかそへて

・平家物語

・「カノ」 用例無し

・「アノ」

一九 其中に法師の頸を一さしあげたり。「さてあのくび
はいかに」と問給へば、

二〇 岸に色ふかき藤の松にさきかゝりけるを、上皇勲覽
あ(ツ)て、隆季の大納言をめして、「あの花おり
につかはせ」と仰ければ、

・天草版平家物語

・「カノ」 用例無し

・「アノ」

二一 あれに見えたは粟津の松原と申す……さござらば、

君はあの松原で静かに御自害なされい、

二二 大宮を上りに六条を東に渡されさせられたを、法皇
も六条東の洞院にお車を立て、勲覽あるに、公卿殿
上人の車も同じう立て並べられた…人々これを御覽
あつて、あはれあの人々に目をも見かけられ、一言
葉をも聞かばやとこそ思つたに、かう見なさうとは
計らなんだと、各々仰せ合はれた。

・天草版伊曾保物語

・「カノ」

二三 或る鹿狩人より俄に追はるるによつて、為方無さに
その方な蒲萄の葛の中へ身を隠した、その口音を
狩人が聞き付け怪しめてたち帰り、「さてはかの葛

の陰に何ぞ獣の居るものよ」と見れば、

二四 或る時驢馬と、狐同道して遊山するところに、獅子王の
前に行き、尾を尻へ、頭を地に付けて申すは、「いかに我らが
帝王聞かせられい、某が命を助けさせらるるならば、かの驢馬を
御身の手の曲に廻るやうに致さうする」と言つた、

・「アノ」

二五 即ち耳を寄せたれば、片方の耳を食ひ切つて、大き
に怒るによつて見る人各肝を消し、「さてもあの盗
人は前代未聞のやつめぢや、

・好色一代男

・「カノ」 用例無し

・「アノ」

二六 きけば、物いはず笑ふて、指さす方に、我が女房を、
常ならぬ、出立、やとひ腰本、やとひ下女、おのれ
も、与七になつて、主あしらひ。是は替つた仕出し
と、様子を問へば、日來は手づから、食を焼せ、
責而けふこそ、人のおかさま並に、被をさせて出懸。
暮たらば、あの姿を其ま横にこかして、我世の思
ひ出さす事なり。

二七 二十四五人、同じ年比、同じ風俗、供の女も、男も

はるかに、さがりて、ゆく、是は何人ぞときく、さる御所方の、御女郎さま達、あのうちに、上ひとり、様もまぎれて、御入のよし、どれとも、見分がたし、毎日の御遊山、かはりたる御物ずき、とかたる、

以上が、調査した作品中の現場指示の「カノ」「アノ」の用例である。「用例無し」と記しているのは、単に用例が確認できなかった事を示す。先に述べたように、現場指示の用例は、話し手・話し手のいる場・指示対象の三つを必要とする為、一般的な物語形式の作品では会話文にしか見られず、その用例数は少ない。又、天草版伊曾保物語以降の作品には現場指示と思われる「カノ」の用例は確認できなかった。これは、現場指示の用例が現れ難い事を考慮しても、余りにも顕著な特徴である為、恐らくは「カノ」が現場指示の用法を失った結果であると思われる。しかし、天草版伊曾保物語はキリシタン資料であり、ある種の規範意識の存在を否定できない事、それと同時代の作品である天草版平家物語には現場指示の「カ」系語の用例が見られない事、それらより古い作品である平家物語にも、本論では扱っていない「カレ」一例を除き、現場指示の「カノ」の用例が見られない事を考えると、「カノ」が現場指示の用法を持っていたのは中世以前と

いう事になるのではないかとと思われる。

用例の具体的な判断基準について記すと、例えば、用例一四においては、「殿、端の方より御覧じいだして」、「見ゆる」という記述がある事から、「カノ」で指される指示対象が発話者の目に見えている事が分かる。他の用例も同様の判断から現場指示の用例と思われる。

上記の「カノ」の用例は「アノ」に置き換えて不自然さは無い。これは現場指示の用法において「カノ」と「アノ」が同等の距離にあるものを指す事ができた結果であると思われる。特に、用例一四では、「カノ」で指される対象と同じ位置にあると思われるものに対して、「アレ」という「ア」系語が先に用いられている。本論で問題としている「アノ」という語形ではないが、「カ」系語と「ア」系語が同等の距離にあるものを指す事ができた証拠になり得る。又、用例を見て分かるように、現場指示の用法と見られる「カノ」「アノ」に明確な差異は無い。指示対象への距離感というものは何分に心理的なものである為、単純に近いか遠いかという事は述べられないが、いずれの用例も非近なものを指すという共通点がある。又、用例数が少ない為、確実な判断はできないが、どのような指示対象に「カノ」「アノ」が掛かるか、つまり、「カノ」「アノ」の下接語にも差異は見られず、発話者の男女

差、身分差といった違いも確認できない。又、用いられた場面
面の相違も特に見られない。先行研究に挙げた古田東朔氏の
結論にある、ア系語には不審・詰問表現が多いという記述に
関しては、古田東朔氏自身も論文の別の箇所ですべているよ
うに、「カノ」「アノ」においては特に片寄りは見られない。

このように、現場指示においては、「カノ」「アノ」は非常に
共通した性質を持つ。時代が進むにつれ、現場指示と見られ
る「カノ」が確認できなくなるのは、この共通性が原因とな
り、「カノ」から「アノ」へと勢力が移行していった為と考
えられる。その時期を特定する事は困難であるが、前述のよ
うに、中世辺りになるのではないかと思われる。

以上より、現場指示の用法に関して言えば、「カノ」「アノ」
を新旧交替の対になるものとする一般的な見方は、非常に妥
当なものであると言える。

次に、記憶指示と思われる「カノ」「アノ」の用例を挙げる。

・竹取物語

・「カノ」

二八 かゝる程に、門をたゞきて、「くらもちの皇子おは
したり」と告ぐ。「旅の御姿ながらおはしたり」と

言へば、会ひたてまつる。御子のたまはく、「命を

すてゝ、かの玉の枝持ちてきたる、とて、かぐや姫
に見せたてまつり給へ」と言へば、翁持ちて入りた
り。

二九 くとて、まいりて申(す)やう、「仰の事をかしこ
さに、かの童を、まいらせむとて仕うまつれば、宮
仕へに出し立てば死ぬべし、と申(す)。くと奏
せさす。

・「アノ」 用例無し

・枕草子

・「カノ」

三〇 すけただは木工の允にてぞ蔵人にはなりたる。くとこ
れを御笛に吹かせ給ふを、そひにさぶられて、「な
ほ高く吹かせおはしませ。え聞きさぶらはじ」と申
せば、「いかが。さりとて、聞きなむ」とて、み
そかにのみ吹かせ給ふに、あなたよりわたりおはし
まして、「かの者なかりけり。ただ今こそ吹かめ」
と仰せられて吹かせ給ふは、いみじうめでたし。

三一

いたううちとけぬ人の言ひたる古き言の、知らぬを
聞出でたるもうれし。のちに物の中などにて見出で
たるは、ただをかしう、これにこそありけれど、か
の言ひたりし人ぞをかしき。

・「アノ」

三二 殿上人、宰相などを、ただ名のる名をいささかつつましげならず言ふは、いとかたはなるを、きようさ言はず、女房の局なる人をさへ、「あのおもと」「君など言へば、珍かにうれしと思ひて、ほむることぞいみじき。

三三 掃部司参りて、御格子参る。主殿の女官御きよめなとに参りはてて、起きさせ給へるに、花もなければ、「あなあさまし。あの花どもはいつち往ぬるぞ」と仰せらる。

・大鏡

・「カノ」 用例無し

・「アノ」

三四 その御心のなを、はりまでもわすれさせたまはさりけるにや御やまひつきてうせたまひけるときにしにかきむけたてまつりて念仏申させ給へと人々のすすめたてまつりければ濟時朝光なんともや極樂にはあらんすらんとおほせられけるこそあはれなれつねに御心におほしならひたることなればにやあので獄のかなへのはたにかしらうちあて、三宝の御名おもひいてけむ人のやうなる事也や

三五

さて式部卿のみやの御事をさりともしさとともたまふに一条院の御なやみをもらせたまふきはに御前にまいり給て御きそくたまはり給ければあのことこそつゐにえせずなりぬれとおほせられけるに

・平家物語

・「カノ」

三六 彼耆婆が医術及ばずして、大覺世尊、滅度を拔堤河の辺に唱ふ。

三七

僧都たかき所に走あがり、沖の方をぞまねきける。彼松浦さよ姫がもるこし船をしたひつゝ、ひれふりけむも、是には過じとぞみえし。

・「アノ」

三八 小松殿父の禪門の御まへにおはして、「あ丹波小將が事を、宰相のあながちに歎申候が不便候。

三九

大臣殿の御まへにたをれふし、なくなの給ひけるは、「あの中將が京よりいひをこしたる事のむざんさよ。

・天草版平家物語

・「カノ」

四〇 それによつてかの清盛の御一家の人々とさへ言へば、公家武家ともに面を向かへ、肩を並ぶる人もござな

かつた。

四一 かの在原の業平が唐衣着つつ慣れにしと詠じけん、
三河の国八橋にもなりしかば、

・「アノ」

四二 そこを出て父の禅門のお前へ参つて、あの成親卿を
失はれうずることをばよくよく御思案なされい。

四三 すでに関東へ下らせらるる六日の夜河越義経に参つ
て申したは…さてあの若君をば何とつかまつらうぞ？

・天草版伊曾保物語

・「カノ」

四四 さてその後三戸を鎮めさせて鷲の子細を述べた。

「かの鷲守護の環を奪ひ取ることは、余の儀ではな
い、

四五 勅使帰つてこの由を奏し、「ただ義兵をもつて攻め
させられつこと難からうず、その子細は、かの所に
イソポといふ学者が一人居住仕る、

・「アノ」

四六 或る鹿の子父に尋ねて言ふは、「何とした子細で
ばしこざるぞ、あの犬にばかりここかしこで追はれ
させざるゑは、

四七 ここでかの番の為に引いて行つた犬どもが思ふやう

は、「秘蔵せらるるあの羊殿、野牛その外耕作の辛
勞をして、

・好色一代男

・「カノ」

四八 去程に、信太妻の女房、江戸風のしよていと申、世
之助様それは其まま、吉原の、かの太夫さまに、い
きうつしといふ。

四九 それより春は、藤浪さまへ見舞へば、かの縮緬、一
巻見えぬはと、せんさく半へ行懸り、

・「アノ」

五〇 花も火ともす時分になつて、太夫勝手へ立さまに、
廊下を半過で、とりはづされて、其言に、疑ひなし。
世之介も、小兵衛も、横手をうつて、おもしろの春
辺やな。天晴、くぜつのもただて、重而出たらば、
座敷が嗅ふて、あられぬといはふ、いや、兩人とも
に、鼻ふさぎて、あのほうから、あらためる時に、
けふ、よき匂ひを、かぎにきたと申せ、是にきはめ
て、待ども出ず、

五一

よし田此事をつつまず、末末の女郎、宿屋の内儀
重都といふ、座頭、やり手まんなど、集めて、其中
にて、ありのままに、語りける、若難儀に申懸ば、

それは、賤しき、御申懸。口舌はさもなくとも、ありぬべしと、申さんために、道替て行に、あのほうに、分別して、いはぬこそ笑しけれ。いかにも、こき手は此太夫じやと、おもひ切て、申されける。

以上、用例二八〇五一は記憶指示の用法と判断した「カノ」「アノ」の用例である。「カノ」「アノ」共に、用例の多くは会話文に用いられている。

用例の具体的な判断について説明すると、例えば、用例二八は竹取物語の用例だが、これはくらもちの皇子が玉の枝を持ち帰ってきたと言い、かくや姫への面会を申し出る場面である。この場面は「門を叩きて」という箇所から始まる。従って、「かの玉の枝」という表現で指し得る先行文脈は存在しない。又、その時に既に自分が手にしているとされる玉の枝に対し、非近なものを指す「カノ」という指示詞を現場指示の用法に用いて指示したとは考えにくい。実際に、現場指示の「カノ」の用例の中には、そのような用例は確認できない。つまり、ここでは、「以前、おっしゃっていたあの玉の枝を持ち帰ってきました」というように、記憶を指示した記憶指示の用法と判断するのが適当と思われる。その他の用例も同様の理由により記憶指示と判断している。

記憶指示の用法が確認できたのは、「カノ」においては竹取物語、枕草子、平家物語、天草版平家物語、天草版伊曾保物語、好色一代男、「アノ」においては枕草子以降の作品である。従って、時代区分としては、記憶指示と見られる「カノ」が確認できるのは中古以降、同様の「アノ」においても同じく中古以降である。猶、大鏡の「カノ」、竹取物語の「アノ」には、記憶指示とも取れる用例があつたが、確実な判断ができない為、除外している。

このように、共に中古以降に確認できる記憶指示の「カノ」「アノ」の相違点としては、平家物語、天草版平家物語の二作品において、どのような觀念に上接するかに違いが見られる点が指摘できる。以下に、平家物語における「カノ」「アノ」の下接語の用例を挙げる。

・「カノ」　　～重衝卿・～頼川・～蕭何・～耆婆・～義明・～不退の土・～離山宮・～周旦・～嵩高山の月・～西光が子・～如来・～松浦さよ姫・～地獄の業風・～唐太子賓客白楽天・～大江山・～妙音菩薩・～蒼梧の野べ・～南内西宮・～維義・～玄奘三蔵・～沛公・～在原のなにかし・～三曲・～秦皇、漢武・～無熱池・～月氏・～木の丸殿・～摩訶迦葉・～淨

名居士・〜頼朝・唐家清涼一山の苾芻

・「アノ」　〜男・〜成親卿・〜丹波少将が事・〜御所・〜六代・〜中将・〜平家の人々・殿

以上の用例から明らかであるように、「カノ」に下接する語には、故事に関するものが多い。一方で「アノ」に下接する語には、そのような例は見られない。平家物語を書き直した作品である天草版平家物語も同様である。これらは、今回調査した他作品には見られない傾向ではあるが、故事に関するものが多い事から考えると、恐らく、文体差によるものであると思われる。補足になるが、現代においても化石的に用いられる「カノ」の用例は記憶指示の用法が主であり、「かの偉人は」と言った。等のように、何か仰々しい印象を与えるものに掛かる。これは平家物語、天草版平家物語に通ずる性質であるように思われる。

一方、記憶指示の「カノ」「アノ」の共通点としては、会話文で用いられる際に、発話者の身分差、男女差等が見られない点、平家物語、及び、天草版平家物語以外の作品においては、下接語に差異が見られない点が挙げられる。又、その二作品を除く「カノ」のいずれの用例も、「アノ」に置き換えて不自然さはないように思われる。

以上より、記憶指示の用法に関しても、「カノ」「アノ」についての一般的な見方は正しいと言える。

さて、以上をまとめると、現場指示、記憶指示の用法においては非常に高い共通性を示しながらも、「アノ」に置き換え難い「カノ」が存在するのは、「アノ」と異なり、「カノ」が文脈指示の用法を持つ為であるという事になる。これで一応の説明が付いたようにも見えるが、まだ問題は残る事になる。それは、何故、「カノ」に文脈指示の用法があるのかという事である。前述のように、現代語において文脈指示の用法を持つのは「ソ」系語と「コ」系語の二系統である。これは文脈指示の在り方が、相手の文脈を指すか自分の文脈を指すかという二つに限られる為である。古代語においてもこれは同様であると思われる。そうであれば、そこに「カ」系語が文脈指示の用法を持つ余地はなく、「ソ」系語と「コ」系語の文脈指示で充分であったのではないだろうか。又、仮に、「カノ」と「アノ」が文脈指示の有無という大きな違いを有する指示詞であったのなら、現場指示と記憶指示の用法において非常に高い共通性を示す事の説明が困難になり、更に、近世に至るまで確認できた文脈指示の「カノ」が何故滅びたのかという疑問が起こる。このように考えると、文脈指示と思われる「カノ」の用例は、あくまでもそのように見えるだ

けで、実際には「カノ」に文脈指示の用法は無いのではないかとこの可能性も考えられる。そのように考えると、新たな説明を提示する必要が出てくる。残念ながら現段階では推測にしか過ぎないが、それは語りのスタイルではないだろうか。殆どの場合において、何かを語る為には語り手と聞き手、或いは書き手と読み手といった、情報の発信者と受信者の二者が存在するものと思われる。現代では、そのような場合は、発信者が受信者に対し、対立した視点から情報を発信するという形式を取るのが普通であるように思われるが、これが古くは異なる形式を取る事があったのではないだろうか。抽象的な表現になるが、発信者と受信者が同じ土台の上に存在し、発信者と受信者の視点が融合したままで語る事ができるスタイルがあったのではないかと思われる。つまり、受信者の実際の知識の有無はともかく、自分と同じ情報を共有しているものとして発信者が語りを進める事ができたのではないだろうか。そのような語りのスタイルを取る際に用いられたのが「カノ」であったとすると、一見、先行文脈にある先行詞を指したように見える用例も、実は発信者と受信者の共有情報を指した記憶指示の用法として処理でき、「カノ」「アノ」に用法上の差異は無いという事になる。つまり、「アノ」に置き換える事ができない「カノ」が存在するのは、現代では融

合した視点で語りを進める事ができない為と考えられる。従って、「ソノ」「コノ」という対立形式に用いられる指示詞に置き換える必要が生じるのではないだろうか。このように、語りのスタイルという視点から考えると、「ソノ」「コノ」に置き換えた方が自然に感じられる「カノ」が存在する事、現代語では地の文に現れ難い「アノ」と対になるはずの「カノ」が地の文にも見られる事、「アノ」と高い共通性を示す「カノ」が近世に至るまで用いられている事の説明が可能になる。繰り返しになるが、以上の語りのスタイルという視点は現段階では推測にしか過ぎない。しかし、可能性の一つとしては挙げられるのではないだろうか。

四 結論

以上より、「アノ」に置き換え難い「カノ」が存在する原因は、文脈指示の有無という用法上の差異が存した為と考えられるより、語りのスタイルが異なる為と考えた方が良いのではないかという一応の結論に達する。つまり、「カノ」と「アノ」についての一般的な見方に、「カノ」と「アノ」は新旧交替の対になるものであり、用法に差異は無いが、運用上の制約が異なる場合がある。」という修正を加えると、ほぼ

全ての用例を説明できる事になるのではないだろうか。又、この定義はあくまでも用法についての記述である為、先行研究の中で紹介した、意味的な差異を述べる古田東朔氏の論と必ずしも相反するものではない。「カノ」から「アノ」へと移行する期間において、両者が何らかの意味的な住み分けを行っていた可能性は多分にある。その住み分けの一部が、現代において化石的に見られる「カノ」に繋がっていくと考え、無理はないのではないだろうか。推測に基く部分もあるが、以上を以って本論の結論としたい。

参考資料

- ・池上秋彦「代名詞の変遷」(『品詞別日本文法講座 名詞・代名詞 明治書院』)
- ・岡崎友子「指示副詞の歴史的变化について」サ系列・ソ系を中心(『国語学』第五三・三)
- ・金水敏「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」(『自然言語処理』六・四)
- ・橋本四郎「古代語の指示体系」上代を中心に(『国語国文』三五・六)
- ・橋本四郎「指示語の史的展開」(『講座日本語学2 文法史』明治書院)
- ・古田東朔「代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異」(『文藝と思想』一四)
- ・山口堯二「指示体系の推移」(『国語語彙史の研究』一一巻)

- ・李長波『日本語指示体系の歴史』
- ・『指示詞』ひつじ書房

テキスト

- ・『国語学大系 第一巻 語法総記』編輯者福井久蔵
 - ・『竹取物語総索引』山田忠雄 武威野書院
 - ・『日本古典文学大系 竹取物語』岩波書店
 - ・『枕草子総索引』監修者松村博司 編者榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美 右文書院
 - ・『大鏡の研究 上巻 本文篇』秋葉安太郎著 桜楓社
 - ・『平家物語総索引』編者笠榮治
 - ・『平家物語 日本古典文学大系 上・下』岩波書店
 - ・『平松本平家物語』清文堂
 - ・『天理図書館 善本叢書 平家物語 竹柏園本 上・下』八木書店
 - ・『天草版平家物語彙用例総索引』近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ共編 勉誠出版
 - ・『文禄二年耶蘇會板 伊曾保物語』京都大学国文学会
 - ・『新編 西鶴全集』勉誠出版
 - ・『新編 西鶴全集 第一巻 好色一代男』勉誠出版
- (くまがい まさひと・本学大学院修士課程)